

大学教員に求められることは何だろう？ 大学教員が専門分野のスペシャリストである以上、当然、「研究」の遂行が求められているし、またその知見を学生に還元し、彼らを指導するという「教育」も大学教員の仕事である。これは当然と言えば当然のことで、あえて言うまでもないことである。この二つが大学教員のメインの仕事と言っても過言ではない。

だがあと二つ、大学教員に求められていることがある。研究で得られた知見を大学内に留めるのではなく、それを地域社会に提供し、よりよい世の中を作り上げていくという「社会貢献」も重要な使命である。象牙の塔に籠ってはならず、社会に還元しないといけないのだ。

最後に忘れてはならないのは、大学内の組織運営に従事する「学内業務」である。学生が学びやすく過ごしやすい環境を作り出すこと、また教職員が仕事しやすい環境を作り出すことは、大学で働く者の不断の働きがなければ到底不可能である。大学教員の間で「学内業務」は「雑務」と呼んで揶揄するきらいもあるが、これから逃げてはいけなし、むしろこれに責任を持って取り組んでこそ〈真の大学教員〉である。私が中京大学に就職したとき恩師にそう言われたし、それは今でも胸に刻み込まれている。

この四点は「中京大学の教員像」にも記されている。「中京大学の教育職員は(…) 研究、教育、社会貢献、大学・部局の運営のそれぞれにおいて自らの役割を自覚し、職責の遂行に全力を尽くす」とある。「研究」「教育」「社会貢献」「大学・部局の運営」という四つの分野に責務があることを、我々教員は再認識しておこう。

さて、今回の『教養教育研究』でも、第Ⅰ部で教育院が企画・運営した講演会等の記録が、第二部で委員会の活動報告が記載されている。これらは、教育院のメンバーが「部局の運営」業務として携わった仕事の記録である。こういった仕事が継続されることで組織が維持され改善されていくのは言うまでもない。それ故、毎年こうして『教養教育研究』が刊行されることの意義は極めて大きい。「研究」「教育」と多忙な中、「学内業務」にも責任を持って取り組んでいただいた教育院メンバーに、この場で改めて感謝申し上げたい。